Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 日本絵画における意匠性 : 十二首和歌絵屏風からの視点 |
| Author(s) | 田中, 敏雄 |
| Citation | デザイン理論. 1999, 38, p. 76-77 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/53237 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 日本絵画における意匠性
## ── 十二首和歌絵屏風からの視点 ──

田中敏雄／大阪芸術大学

我国の絵画における意匠性と言えば，「誰が袖図」屏風や「武蔵野図」屏風や「柳橋水車図」屏風に見られる和歌の主題を工夫を凝らして画面を構成して意匠性を表わす。また，宗達・光琳のような琳派の画家達の絵画における構図の奇抜さやしっとりとした色彩の取り合わせ，絵筆の使い方による大胆な形似，理知的な主題の構成等々絵画に装飾性・意匠性豊かに描かれた作品がある。これらの絵画における装飾性や意匠性は現代まで生かされ，絵画，工芸，デザイン等の造形分野に与えた影響は大きい。

今度，発表で紹介する「十二首和歌絵」屏風は「柳橋水車図」屏風等や琳派の絵画と根を一つにするところもあると思うが，主に絵画における扇面形，団扇形，円窓形等の伝統的な画面形式と器物（静物）形の新しい画面形式に描かれた装飾性や意匠性のある絵画について紹介を試みたく思う。

### 一．十二首和歌絵屏風の概要

この十二首和歌絵屏風（六曲一双，絹本着色，本紙にあたるところの法量は，90.6×42.3㎝）は十二扇各々に十二幅の掛幅が掛けられたような状態で描かれている。即ち，屏風の一扇ごとに表具の裂や発装，軸端，掛緒や釘までも描き，廻りには金箔が貼られ，あたかも金屏風に軸がかかっているように描かれている。そして，描かれた掛軸の本紙には各種の形の中に和歌が書かれ，絵が描かれている。

右隻　第一扇
和歌　短冊形　一条関白冬経（1652〜1705）
絵　色紙形
第二扇
和歌　団扇形　近衛左大臣基熙（1648〜1722）
絵　団扇形
第三扇
和歌　団扇形　鷹司右大臣兼熙（1659〜1725）
絵　団扇形
第四扇
和歌　冊子形　有栖川宮幸仁親王（1655〜99）
絵　冊子形
第五扇
和歌　瓢形　妙法院堯恕法親王（1649〜95）
絵　瓢形
第六扇
和歌　円窓形　一乗院宮真敬法親王（1649〜1706）
絵　円窓形
左隻　第一扇
和歌　色紙形　実相院宮義延法親王（1662〜1705）
絵　色紙形
第二扇
和歌　軍配形　今出川内大臣公規（1628〜97）
絵　軍配形
第三扇
和歌　鼓の革形　大炊御門前内大臣経光（1638〜1704）
絵　鼓の革形
第四扇
和歌　扇面形　大乗院前大僧正信雅（？〜1690）
絵　扇面形
第五扇
和歌　色紙形　三宝院大僧正高賢（？〜1707）
絵　色紙形
第六扇

和歌　茶壺形　高松入道源英（1622～95）
絵　　茶壺形

以上本屏風の和歌の筆者は親王，公卿等十二人である。また，絵の筆者はそれぞれに落款・印章があり，土佐光成であることが解る。

## 二．本屏風と松平頼重

本屏風は讃岐の松平家に伝世し，左隻第六扇に松平頼重の自詠の歌があることから，本屏風と松平頼重との関係が指摘できる。松平頼重は幼少の頃京都で育ち，和歌等の公家的文化を身に付け，皇室・公家とも関係を密にし，自身の娘を公家に嫁がせている。松平頼重と公家との関わりを示す作品は讃岐の金刀比羅宮・白鳥神社・善通寺等に奉納された三十六歌仙扁額からも知ることができる。本屏風は松平頼重の公家との交友関係によって生まれた。

## 三．本屏風の制作年代

本屏風には制作年代を明らかにするような直接的な史料は残されていない。制作年代を推定するために，和歌の筆者の生没や在位期間や絵の筆者の生没等を考察すると，天和三年（1683）～貞享元年（1684）頃の制作であることが推定できた。また，制作年代の頃は松平頼重が六十二，三歳であり，病身がちの頼重が還暦の記念も兼ねて制作させたと思われる。

## 四．土佐光成について

絵の筆者の土佐光成（1647～1710）は土佐派を再興させた土佐光起（1617～91）の子で，父の跡を継いで宮中の絵所預の職についた。父の土佐光起の画法を受け継ぎ，やまと絵の伝統的画法を身に付けて，繊麗な筆使いと雅やかな色彩をもって本屏風のような小画面もよく描いたものと思われる。

## 五．紙絵と画面形式

本屏風は公家等による自詠の歌とその歌の意を絵画化した歌絵からなる。その自詠の歌や絵が書かれたり，描かれたりしているものは種々の形をしている。歌絵の画面形式は扇面形，団扇形，円窓形，色紙形のように本屏風以前に既に画面形式として古くから用いられていた形がある。それと，茶壺形，冊子形，鼓の革形，軍配（扇）形のような器物の形を画面形式として用いている。それらはどちらも小画面である。このような小画面の歴史を考えてみると，平安時代の紙絵がもとになったのではないか。即ち，一枚の紙に物語絵や歌絵を描いて，つなぎ合わせると絵巻になり，綴じると冊子絵になり，扇形に切ると扇面絵になったりする。『源氏物語』にも「この頃の世には，たゞかくおもしろき紙絵をとゝのふることを，天の下いとなみたり」と記され，紙絵は当時の流行であり，貴族の美をあらわしたものでもあった。中世にあっても，障子の色紙絵や扇面貼交屏風や土佐派が得意とした小絵といわれる小さな絵巻物に受け継がれ，近世に入っても本屏風のような種々の画面形式をした小画面の絵が描き続けられたのである。

## 六．画面形式の多様性

本屏風には扇面形，円窓形，団扇形等の伝統的な画面形式の他に瓢形や冊子形，軍配形等の器物（静物）を写した形状の画面形式がある。これらは，寛永時代に静物を人生的関心として写す（源豊宗説）ことが行われた。また十七世紀後半には器物に絵を描くことが流行した（『都今様御所友禅ひいながた』）ことが相俟って生まれたのではないかと推論した。それぞれの形は松平頼重の個人的関心によることも論じた。

発表内容の詳細は『野村美術館紀要８』に記した。